

## 海外研修報告

# シュタイナー教育を訪ねて

—— 自由ヴァルドルフ学校視察報告 ——

白 佐 俊 憲 加 藤 満 北 村 優 明

## I はじめに

このレポートは、1983年3月20日～4月8日の20日間、報告者3名が「北海道女子短大海外研修規程」に基づく旅費支給を受けておこなった「中央ヨーロッパ3国の教育・体育施設視察」の研修成果を報告するものである。紙面の関係で、ここでは、自由ヴァルドルフ学校関係の視察結果のみの報告にとどめることを前もってことわっておく。

「自由ヴァルドルフ学校 (Freie Waldorfschule)」——「ルドルフ・シュタイナー学校 (Rudolf Steiner Schule)」と呼ぶところも少なくない——は、西ドイツを中心に設立され、最近、ヨーロッパやアメリカで急速にその数を増やしている初等・中等教育（日本の小・中学校及び高校の全課程に相当する）を一貫しておこなう私立の学校である。この学校の教育実践は人間性回復の実践運動の一環ともいえるものであるが、その特徴的な教育方法・内容は、今日、世界的に注目されるどころとなつていっているといっても過言ではない。

われわれは、この特色ある教育の実践を実際の場合において垣間見るべく視察旅行を企画し、シュタイナー教育（又はヴァルドルフ教育）の創始者であり、今日なお精神的支柱であるルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner) の縁の地の関係施設を訪ねることにした。訪問地には、彼が大学に学んだウィーン（オーストリア）、人智学運動の中心であるドルナッハ（スイス、バーゼル近郊）、彼が精力的な講演活動をおこなったミュンヘン（西ドイツ）、最初の自由ヴァルドルフ学校が誕生したシュツットガルト（西ドイツ）などを選んだ。実際に視察をおこなうことができた所は、次の通りである。

- ① Rudolf-Steiner-Schule Wien……ウィーン
- ② Goetheanum (Freie Hochschule für Geisteswissenschaft) ……ドルナッハ
- ③ Rudolf-Steiner-Schule Birseck (Kindergarten am Ort) ……ドルナッハ
- ④ Rudolf-Steiner-Schule Basel……バーゼル
- ⑤ Rudolf-Steiner-Schule München……ミュンヘン
- ⑥ Fridel-Eder-Schule……ミュンヘン
- ⑦ Seminar Für Waldorfpädagogik, Stuttgart……シュツットガルト

われわれの訪問は復活祭 (Ostern) の休みにかかる時期であったが、関係者の好意あふれるはからいで、十分な成果を得て帰ることができた。以下に、見聞した概要を（帰国後文献で確認した点も含めて）紹介する形で述べる。

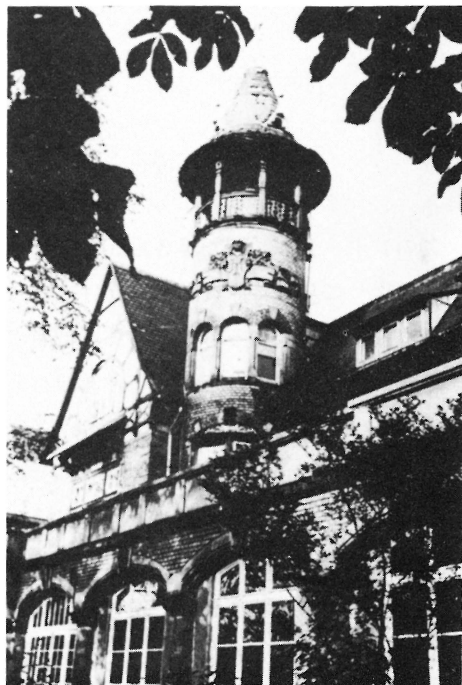
## II 自由ヴァルドルフ学校の創立と歴史

自由ヴァルドルフ学校（以下、ヴァルドルフ学校という）は、1919年9月、シュツットガルト市に創立された。それは、シュタイナーが、同市にあったヴァルドルフ・アストリア煙草工場の社長エーミル・モルト（Emil Molt）の依頼を受けて、同工場の労働者及びその子弟のために設けたものであった。しかし、創立当初から一般の子弟も入学させており、最初からシュタイナーの唱えた人智学的教育学（Anthroposophische Pädagogik）の実践の場<sup>\*</sup>であったといえる。

この学校は、シュタイナーの主張にふさわしく、あらゆる社会階層の子どもたちを一つのクラスで教育するという、階級意識の強い当時のヨーロッパ社会では他に類をみない形態で始められた。開校にあたって彼は、これから創り出される文化が人類の真の発展に寄与できるためには、新しい世代が一切の偏見から自己を解放することができなければならない、学校はこのような自由な人間を育てる場所でないといけない、と主張した。学校に「自由（Freiheit）<sup>\*\*</sup>」の文字を冠しているのは、自由な人間を育てていこうとする決意の表明であり、そういう教育をおこなう「自由」を社会に対して宣言するという意味をもっていた。

シュタイナーは、彼独自の人間認識に基づき、子どもの発達段階を、誕生～7歳、7歳～14歳、14歳以降の3段階に分け、それぞれの発達特性

写真1 最初の自由ヴァルドルフ学校



（レストランを改造したもの）

写真2 写真1の現存する部分



\* 教育理念・方法が人智学を根底にしているということである。学校は人智学に共鳴する教師らによって運営されているのであるが、学校で生徒に人智学を教えることはない。シュタイナー自身、これを未完成の子に教えるべきではないといっている。

\*\* ヴァルドルフ学校で「自由への教育（Erziehung zur Freiheit）」ということがしばしば強調されるが、それは「生徒たちに自由放任でのぞむ」という意味ではなく、「生徒たちが大人になってから、精神が何にとられることもなく自由に活動して、自己を実現できる人間になるように」という意味においてである。つまり、「自我を育てる」ことである。

を考察した。彼によれば、学校教育は、これらの発達特性に即し、それらが十分発達を遂げるような機会を与えなければならない、とされる。このような哲学的基础に立ち、シュタイナーは、初等教育と中等教育の分断を排して12年間の一貫教育の提供を主張し、早教育の導入による人間の促進化と能力別による選別に反対し、一人一人の子どもの発達と個性に即した教育の必要性を主張したのである。

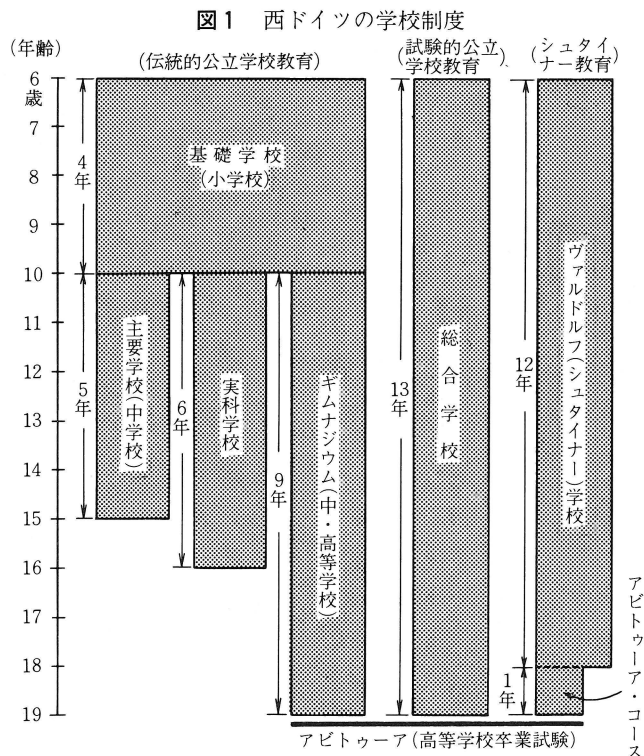
1920年代のドイツの新教育運動を背景として、シュタイナー教育は、特色ある教育実践を積み重ねる中で多くの理解と支持を得て、シュタイナー自身は最初の学校を建てて6年後に他界してしまった

が、彼の考えに共鳴する人たちの手で着実にその輪を広げていった。しかしながら、1938年、ナチスの弾圧にあつて、当時7校を数えたドイツのヴァルドルフ学校は閉鎖に追いやられた。そして、第二次世界大戦の終結とともに、各地のヴァルドルフ学校は再開され、さらに多くの地域に新設されながら今日に至っている。1981年現在の数は、西ドイツに70校（生徒数3万人。われわれに対する説明では、1983年春の時点で85校）、他のヨーロッパ諸国に135校、ヨーロッパ以外の国に52校となっている。ただし、アジアには1校も存在していない。このほかに、自由ヴァルドルフ学校連盟には、数多くの幼稚園や医療教育施設が加盟している。

このように、「自由ヴァルドルフ」あるいは「シュタイナー」の名を冠する私立の学校・幼稚園は、最近、西ドイツを中心に驚くべき勢いで増加している。最初の学校が創立されたのは60数年も前のことであるが、教育現場では、シュタイナーの人間認識から導き出された特色ある授業形態を現在も踏襲し、教師は努力と創意・工夫を重ね、「子どもの成長を援助する」という課題に取り組んでいる。

### Ⅲ シュタイナーの略歴と教育活動

ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861.2.27~1925.3.30）は、教育関係の辞典では教育者とされているが、一般の人名辞典・百科事典では哲学者あるいは社会思想家となっており、建築家・造形芸術家・神秘学者などと呼ばれることも多い。このように多方面にわたっ



て活躍した人であり、教育者だけと規定してしまうことはできない。

彼は、1861年、オーストリアとハンガリーの国境近くの小村（現ユーゴスラビア領）に、ドイツ人の鉄道技師を父として生まれた。ウィーンの実科学校を経て、同地の工科大学に学んだ。在学中すでにゲーテ（J. W. Goethe）に興味を抱き、ゲーテ・シラー文庫や文学雑誌の編集にたずさわり、ゲーテの自然科学関係の論文の解題などに主として当たっていた。29歳の時ワイマール博物館に赴き、そこに7年いたが、その間ヘッケル（E. H. Haeckel）やニーチェ（F. W. Nietzsche）と親交をもち、彼らの思想に深く傾倒した。36歳の時ベルリンに移って『文学雑誌』を刊行し、同時にリープクネヒト（W. Liebknecht）が設立した労働者学校の教師として活躍した。41歳の時、国際神智学協会の会員となったが、やがて著しいインド的な神智学協会に不満を感じ、自ら「人智学（Anthroposophie<sup>\*</sup>）」を主張して、1913年（52歳時）人智学協会を設立した。

シュタイナーが自分の研究の道に「人智学」の呼び名を与えたのは1902年であるが、自分の研究が人間の本当のあり方を認識することを目指しているのも、ギリシア語の <sup>アントロポス</sup>Anthropos（人間）と <sup>ソフィア</sup>Sophia（智慧）とを組み合わせた <sup>アントロポソフィー</sup>Anthroposophie という語を当てるのがふさわしい、と彼は考えたのである。

彼は、活動の本拠地を初めミュンヘンとしたが、後にスイスのドルナッハに彼の尊崇するゲーテの名にちなんだゲーテアナム（Goetheanum）という精神科学自由大学を建てた。第一次世界大戦中及び戦後のヨーロッパにおける政治・経済・社会・宗教・芸術などの多方面の問題をその立場から解明し、数多くの講演や著述を通して広くこれを普及させた。

以上の経歴からも明らかなように、シュタイナーの教育分野での仕事は、彼の活動のごく一分野にすぎなかった。理論的には、前述のいわゆる人智学的教育学を唱えたのであるが、教育的な分野に向かおうとする動きは比較的晩年になってからである。教育理念である『精神科学の立場からみた子供の教育』を著したのは46歳の時であり、実践の場として「自由ヴァルドルフ学校」を創立したのは58歳の時である。しかも、この学校でのシュタイナーは、もちろん精神的支柱ではあったが、校長でもなければ経営者でもなく、自分の活動の本拠をドルナッハに置いて、定期的に助言や

写真3 ルドルフ・シュタイナー



\* 「人智学」を一言で述べることは極めて困難であるが、あえていえば、次のように要約することができよう。すなわち、神智学が認識の中心に神をおくのに対して、人智学は認識の中心に人間を置き、一面では科学的知識を採用しているが、主として神秘術に基づいて真理をきわめ、救いを求めようとする。つまり、あらゆる人間のうちにある不思議な認識能力が呼びさまされ、訓練されると、一種の透視力が得られ、それによって超感覚的（精神的）世界を認識することができるようになり、自我を高揚・浄化することができるようになる、と説く。

指導をするために来校するにすぎなかった。したがって、彼の教育思想・活動を云々する場合、生活のすべてが教育活動である専門の教育者とは同じレベルで論ずることはできないのである。

超人的な行動力で仕事を成し続けた彼も、1924年9月、病床に臥すことになる。未完の彫刻作品『人類の典型』の傍らに置かれたアトリエのベッドで『自叙伝』を書き続けたあと、多数の人々に愛惜されながら、1925年3月30日、64歳でこの世を去った。

## Ⅳ 自由ヴァルドルフ学校の建物・施設

### 1. 不均等を基調とする建物

その近くまで行けば、ヴァルドルフ学校をさがし当てるのはそれほど難しくない。近代ヨーロッパの合理精神を象徴するかのような堅固な四角い建物が立ち並ぶ中を進んでいくと、一見奇異な印象を受ける建物がすぐ目に入ってくるからである。

学校に限らず、幼稚園・病院・劇場・民家などもそうであるが、シュタイナー思想を具現した建物は、輪郭が統制のある四辺形ではなく、屋根に丸みや波形のうねりがあったり、窓が直線的、対称的に連続していなかったりする。外観ばかりでなく、玄関も、廊下も、階段も、部屋も、そしてドアも、電燈の笠さえも、違った形で角が切り落としてあったり、丸みをつけてあったりして、直線的な、シンプルな、画一的なデザインを避けようとする感じがある。普通の建物では、90°の角度や四角や丸の形を基調にして、シンプルに、すっきりしたものにするという考慮がなされるが、この学校では、形というものを「機能的でないように、理性的でないように、自由に発展していくように」配慮しているという。

建物全体を鳥瞰的に見ると、決して四角形の組み合わせではなく、八角形や扇形、あるいは腕を大きく広げたような形になっており、「子どもたちを、お客様を、喜んで迎え入れる姿勢をとるような構造に設計されている」のだそうである。

話が少し横道にそれるが、この少々風変わりな建物がいくつも点在していて、われわれに一つの驚きを与えたのは前述のドルナッハという町である。見晴らしのよい丘に、シュタイナー自身が設計したゲーテアヌムを中心に、自然とよく調和した家並みがパノラマを見るように浮かび上がり、何かを語りかけてくるように思えるのである。

自然の素朴さ・温かさを大切にすることも、ヴァルドルフ学校の特色である。玄関ホールに自然の材木そのままといったベンチが置いてあったり、天井に用いる木材にカンナをかけないで生地のままにしている（音の反響を弱くするため）という所もあった。

建物の特徴を述べるにあたって、校舎の内外の壁の色彩についてもふれておかなければならない。ピンク色やクリーム色の外壁。教室によって色の異なる内壁。つい、何か意味があるのか、と質問してみたくなる。答えは、大いに意味があるということであった。

例えば、学年によって教室の壁の色が異なる点についていえば、これは「シュタイナーが説いた理論と一致するもので、子どもの発達段階にはそれぞれ色がある」のだという。すなわち、1年生には暖かい赤（何かを守ってくれるような赤）、それからオレンジ、黄色、……となって

写真4 ミュンヘンのルドルフ・シュタイナー学校



写真5 パーゼルのルドルフ・シュタイナー学校



写真6 高学年の学級のある廊下の一部



いって、最終段階の学年では青の色が適しているという。教室の壁に色をつける目的は、生徒の美意識にうったえようとするのではなく、生徒の精神に何かをうったえようとする。したがって、均一な色調は不相当であり、濃淡のある織物のような印象を与えるものが多い。そのために、地壁の白の上に、赤なら薄い赤を何回も何回もぬり重ねていく作業をおこなう。その結果、統一はとれていないが、生徒の精神に訴え何かを引き出す味わい深い色合いができあがるのだそうである。

## 2. 豊富な施設・設備・教材

ヴァルドルフ学校では、後に述べる教育内容から明らかなように、生活体験学習が重視され、芸術（情操）教育や感覚リズム教育が強調されるので、これらのための施設・設備・教材が豊富に用意されている。

例えば、食物の生産・加工過程の体験学習のために、農園やパン焼き小屋がある。有機農法による土地づくりから、小麦の蒔きつけ・収穫・製粉、その小麦粉を材料にしてのパン焼き、そして最後の試食までの過程をすべて体験するようにプログラムされている。

木材・粘土・繊維（羊毛・木綿）・鉄板など、なるべく素材に近い材料を用いての生活品・工芸作品の制作のための各種作業教室がある。織物を例にとれば、羊毛から糸を紡ぎ、染色し、それを用いて機<sup>はた</sup>を織って作品を作る全過程の体験をするようになっている。

劇場のようなホールもだいたい<sup>\*</sup>の学校にある。ここで、月例祭・学校祭・音楽演奏会・卒業芝居<sup>\*\*</sup>・卒業制作などの発表・公演がおこなわれる。

自然の素材さ・温かさを大切にす点から、校具・遊具などには、プラスチックやスチール製品はなるべく避けるようにし、自然の材料を用いた、しかも生徒自身や教師・父母による手造りによる製品を愛用するようにしている。

## V 自由ヴァルドルフ学校の運営・経営

### 1. 対等な話し合いを基本とする経営

ヴァルドルフ学校は、1校1校が自治・自律の精神で運営されている。自由ヴァルドルフ学校連盟という組織があるが、これは、個々の学校にとって荷の重い様々な課題（教師養成・対外活動・研究など）を、共同体共通のものとして果たしていくための中央機関である。

この学校の自治・自律の精神による運営は、創立時からなされていた。シュタイナーは、前述のように、ヴァルドルフ学校の創立者ではあったが、校長でも理事者でもなかった。教師たちとの関係も、師と仰がれていたが、身分上の格差はなかった。教師相互の関係も、同様に身分上の格差はなく、皆で力を合わせてシュタイナーの構想した教育理念の実現に努力していた。この伝統は今日まで受け継がれ、財政運営の母体である財政委員会と、教師によって組織されている教員会議とは全く独立していて、干渉し合うことはない。

\* 毎月おこなわれる学芸会のような授業内容の発表の場。

\*\* 8年生と12年生の終わりに、長期間かけて準備し公演する本格的な演劇発表の場。

また、この学校には、普通の学校にみられるような校長・教頭・主任といった身分をもつ教師はだれもない。つまり、管理職がないのである。対外的に代表者が必要な場合は、当番の教師が回り持ちでこれに当たる。教務・人事・会計といった職務上の責任も当番制で、これらの仕事は「身分」にはならない。

自律的経営の主体となる教員会議には教師全員が参加して、毎週1回学校運営の全体について話し合う。必要に応じて運営委員会を作るが、メンバーは交替する。専門家としての経験と能力において優れている数名の熟練教師が精神的中核となって、学校運営の責任を負い、若い教師たちに助言や指導を与える。教員会議には必ず学校医が入っているが、学校医は教師として1科目を担当しながら全生徒の肉体的、精神的発達を専門家としての立場から観察し、教師たちの個別の相談にも応じるのである。

以上のように、自律性を重んじ対等な立場に立って、学校間・教師間のコミュニケーションがはかれるが、父母との話し合いも重視して運営される。「両親の夕べ (Eltern Abend)」と呼ばれる父母会が月1回以上開かれる。夜8時ごろから2時間程度の会合がもたれる。これには、夫婦で出席する家庭が多い。この学校の父母会の特色は、クラス全員で教育内容などの共通の問題を話し合う点にあり、公立学校の父母会が個別面接でもっぱら学業成績のことを話題にするのとは対照的である。ほかにも父母との関係を密にする場は多く設けられている。

## 2. 面接による入学者の選抜

ヴァルドルフ学校は、かつて「バカが行く学校」とか、「勉強をしない音楽学校」といった評判を立てられたこともあったそうであるが、今日ではむしろ「エリート学校」視される評価を受けているようで、入学希望者は受け入れ予定の2倍を超える状況にあるという。1学年2学級、1学級35~40名というのがこの学校の標準的編成であるが、ここで、この学校の入学者選抜についてふれておきたい。

多くの希望者の中から入学者を決定する方法は、面接である。つまり、能力の高い者を集めようとする試験も、全員平等に選ばれるチャンスを与える意味での抽選もおこなわれない。面接のねらいは、もっぱら相互(親と学校)の教育観をつき合わせることにあり、学校側は、シュタイナー教育への親のかかわり方の度合いをみようとする。これが唯一ともいえるポイントであって、その他の要素(親の学歴・職業・人種・宗教・経済力など)は問題にされない。

親との面接では、この学校の具体的内容に、親として本当に納得できるかどうか、そして、このユニークな教育の背景を学び知る姿勢になれるかという点について、十分な話し合いがもたれる。点数主義・知育中心の思想を捨てるというのは、親として現実になかなか困難であって、ムード的にとびついて入学しても、そういう学校観が意識の底に残っていると、結局後が続かなくなるからである。

子どもの面接では、2名の教師と1名の小児科医が、子どもを自由に遊ばせたり、絵をかかせたりして観察をおこない、6歳程度の発達段階に達しているかどうかを見る。

実際には、ヴァルドルフ幼稚園からの入学者が多い(12年間の一貫教育を更に広げる意味で、



幼稚園を併設している学校が増加している)。

念のため一言付け加えておきたい。私立の学校というと、きっと納入金が高いであろうから、結局裕福な家庭の子どもしか入学できないと思われるであろうが、この学校では、次に述べるように、貧しい家庭の子どもは納入金を全然納めなくてもよいのである。したがって、入学面接の際、経済力を問われることはないのである。

### 3. 公的機関に財政的援助を求めない経営

ヴァルドルフ学校は、私立であり「自治・自律」を守り続ける学校であるので、国や地方自治体に対して特に援助を求めることなく、自らの収入（生徒の納入金、支持者からの寄付金）で経営している。ただし、拘束の伴わない公的補助は受け入れている。

主な財源である生徒の月々の納入金（授業料）は、学校が一定額を決めて示すのではなく、両親の収入水準をもとに財政委員会と父母とが個別に話し合っ決めて決める。すなわち、親が可能な額を申告し、月々納めるという制度になっている。この申告は入学が決まった後でおこなわれる。生活保護家庭のような場合には、全然納めなくてもよい。入学後は、毎年事務的な問い合わせが学校からきて、各家庭は次年度の納入額を変更するかどうかを届けるだけになっている。納入金額は、学校では事務担当者以外はだれも知らない。

こうした方法をとっているのは、シュタイナー教育の重要な柱の一つに「経済的な理由でこの学校に入れないという子どもがいることは、それだけで自分たちの理念に反する」という考えがあるからである。これはまた、子どもが卒業した後も機会あるごとに寄付する気持ちを親に起こさせることにもなり、シュタイナー教育が一つの社会運動となる基盤にもなっている。

関連して、教師の給与についてふれておきたい。ヴァルドルフ学校の教師の給与は、個人的な事情（家族数とか、子どもの教育費とか）によって決められ、学歴や年齢や経験年数などによる格差は存在しない。すなわち、全員が平等なのである。その水準は、例えば、ミュンヘンの学校の場合、西ドイツの公立学校の教師に比べると、3分の2程度に当たるといふ。ヴァルドルフ学校の教師であることに誇りと喜びを感じている人にとって、給与の額は問題ではないようだ。

### 4. 重視される教師養成

「教育問題は教師問題である」といわれる。いくら理念や制度や施設・設備がよくても、それを正しく運用していく力量も技術もない教師集団では、真の教育が成り立たないからである。シュタイナーも、最初のヴァルドルフ学校開設にあたって、教師の資質を第一の条件としてあげている。彼は、当時の教師採用試験を批判して「今日の教師に対する試験は、多少の知恵がありさえすれば、その時たとえ知らなくても後で辞書か参考書で調べればわかるようなことを知っているかどうかを試しているにすぎない」と述べ、教師の資格として問われなければならないのは「児童・生徒と好ましい関係を生む能力があるかどうかであり、彼らの魂と全存在の中へ全身全霊で入っていけるかどうかを第一に問うべきである」と強調した。

シュタイナー教育では、この教師の資質を特に重視して、独自の教師養成の方法をとってい

る。ヴァルドルフ学校の教師になろうと志す者は、正規の国家試験による免許取得後に、1～3年間のヴァルドルフ教師養成機関（この教授は、全員ヴァルドルフ学校のベテラン教師である）で教育を受けなければならないのである（教師養成の方法は、われわれにとっても関心の深いところであり、シュツットガルトでは日本人留学生からも話を聞くことができたのであるが、詳細は別の機会に述べることにし、ここでは省略する）。また、新しく採用された教師は、本当にこの学校の教師となる適性をもっているかどうかを自分で確認するために、最低1年間見習教師として過ごし、その間に熟練教師の指導を個人的な形で受けることができるようになっている。前述の教員会議は、教師の研鑽の場として機能するようにも運営されている。

## VI 自由ヴァルドルフ学校の教育方法

### 1. 8年持ち上がりの学級担任

この学校独得な制度の一つに、1年入学時から8年生の終わりまで、同じ学級担任が同じクラスを持ち上がるというシステムがある。この制度は、人間の成長をおおよそ7年ごとの段階にまとめて考えるシュタイナーの人間観に基づくものであり、子どもの刻々と変化する成長を有機的な発展の相としてとらえ、これに正しく対応し、その成長を援助していこうとするものである。つまり、成長の第二の時期を一つのものとして、全体を見通しながら教育していくのである。いわば、運命共同体をつくり上げることになる。

ここには、教育を担任教師の責任においておこなうという意味がある。この制度は、教師に、教育という仕事の重みを実感として受けとめさせ、自分の欠点や弱点の克服を内面から促し、さらに、子どもの成長に随伴していくことによってのみ開かれる人間を見る目を次第に深めさせようとする。自分に託された子どもの諸能力を可能な限り開いてやらなければならないという課題は、教師の実践活動のすべてを「真の人間の生を追求する営み」にしてしまうのであろう。このように、子どもの成長に奉仕することによって人間認識を深めて、教師もまた成長していくことができるのである。

少し具体的に述べると、学級担任は、すでに入学を決める話し合いの段階から立会っていて、子どもたちと知り合いになる。そして彼は、1年生から8年生まで継続して指導するのであるが、毎日、8時10分から9時50分まで基本授業（Hauptunterricht）をそのクラスでおこなう。この授業では、いわゆる主要教科（日本でいう国語・算数・社会・理科に相当する内容）が教科書なしで、後に述べる「周期集中方式」によっておこなわれる。

8年持ち上がり制は、父母会や家庭訪問によって、子どもたちの家庭と緊密な共同作業を作り出していくことなどにおいても有効である。

8年間の基礎的な学習が終わると、学級編成はそのままで、担任だけが替わり、専科制となる。この後期4年間の担任は、相談役とでもいふべきもので、以前の担任とは質的に異なる。

### 2. 周期集中方式の授業（エポック授業）

前に述べた、担任教師が基本授業を教科書を使わずに教えるということは、この学校の特色

の一つである周期集中授業方式をとることによって可能となる。周期集中方式の授業（エポック授業，Eopchenunterricht）というのは、主要教科の1科目だけに集中して毎日8時10分から9時50分まで学習し、これを3～5週間続け、一つのまとまりがついた段階でこの教科は一時的休み、別の教科を同じように数週間続けるという方法である。生徒の学習経験に一貫性と連続性をもたせ、授業の能率を上げようとするものであるが、「こまぎれを排して全体を大きな一つの単位に」という考えが根底にある。

一般の学校の45分単位の授業は、この授業時間内に一つの点をはっきり学習することができるという長所をもっているが、学習するテーマの目まぐるしい交替によって注意散漫になったり、表面的学習になりやすい欠点をもっている。この学校の基本授業は100分通しであるから、教材の中に没頭することが可能であり、これが徹底的に対象に向かう態度を育て、長時間の集中を生徒たちに可能にする。数週間、一つのテーマをめぐって授業がおこなわれることは、集中力を持続させ、これを次第に盛り上げていくという緩やかで大きな傾斜をたどることになるので、生徒たちに内発的な興味を自然に呼び起こさせることになる。

この方法に対して、だれもが次の問題点を指摘するであろう。それは、次にその教科の授業が回ってくるのは数か月後になるはずであるから、それまでに生徒はいま覚えたことをきっと忘れてしまうであろう、ということである。この指摘に対して、シュタイナーは「それでいい」と断言している。むしろ、数週間の間、集中力をそそいできたことには、十分な休止期間が必要なのだという。休止期間は学んだことを内面的に消化する期間であって、たとえ表面的には学習内容を忘れてしまっているように見えても、同じ教科にもどってきた時には、ちょっと復習することにより容易に思い出されるし、前に理解できなかったことがわかるようにもなっているという。この場合、別の教科の学習は生徒の総合的な力となって理解力を助けていることも見逃せない事実であって、一つの教科の学習は独立して存在するものではなく、すべての教科が相互に関連し合っって一人の人間をつくり上げていくのだということになる。

### 3. 教科書なしの合科学習

シュタイナー教育には「なんでもこまぎれにすると生命が流れない」とする考えが根本にある。したがって、基本授業に、算数のエポック、国語のエポックというテーマは与えられても、はっきりとした枠をもった教科にはなっていない。つまり、算数のエポックであっても、絵をかいたり、歌をうたったり、お話を聞いたり、からだを動かしたりして、その色彩やリズムや動きの中から九々の感覚やピタゴラスの図形を発生させていくのである。

教科の区別を表面に出すことをなるべく避け、子どもの生活に身近なテーマを選び、これにさまざまな教材を結びつけて教えるいわゆる合科教育は、今日、西ドイツの公立学校でも初等教育の低学年では一般的であるが、やはり今世紀初めの新教育運動の流れに乗って生まれたものである。理論的には、自然や人生は統一的、調和的全体をなすものであるとする世界観的な根拠と、子どもの心理や生活は未分化で融合なものであるとする心理的な根拠とがある。

この学校のカリキュラムについての考え方は、公立の学校とは違っている。例えば、歴史の

場合、歴史の教材項目を並列的に網羅して、これを学年別に割り振る、というような方法とはならない。教師は、いつも子どもの側の心身の状態を見とどけて、それに合わせて、今はどういう教材が必然性をもちうるか、と考える。だからこの学校では、いわゆる教科書を用いないし、教案も、担任の教師がクラスの実情と最終の到達度を考慮しながら自分で作る。授業の1回1回がすべて担任の手づくりである。このような方法は「教育は創造的営みでなければならぬ」というシュタイナーの考えに基づいている。

子どもたちは、エポック・ノート<sup>\*</sup>と呼ばれる大判のノートに、絵や図や文章をかき入れる。それが結果的には、各自の手づくりの教科書になるように、授業が進められる。「市販の教科書では、すでにできあがった知識が整理されていて、これを受け取るだけでは、その知識が生徒の活力となることはない。知識は、生徒が学ぶプロセスの中からわきあがってくるべきだ」と考えられており、自ら学ぶという能動性を育てるために、ノートづくりの授業が1年生から12年生まで徹底しておこなわれる。

#### 4. 豊富でユニークな授業内容

すでに述べたように、ヴァルドルフ学校では、知育中心の教育は否定され、「頭と心と手足のつながった人間」を育てる教育がおこなわれている。つまり、「本で読んだり、他人から聞いたりして頭に入れた知識を自分の手と足で確認すること、逆に、自分の手と足で触れた外界の事象を『これは何か?』との意識でもって、頭に送りこむこと」が重視される。では、この学校のカリキュラムが具体的にどうなっているか、少し詳しくみてみよう。

学年の考え方は、①1・2年生はからだの成長の段階として、おもに絵とリズム感覚に関心をもつ時期である、②3・4年生になると、だんだんと理性が芽生えてくる、③5・6年になると、いよいよ見る目が広がってきて、自然現象や世界情勢が理解できるようになる、④7・8年生では、本格的に理性に向かう時期である、……ととらえられている。

毎日、午前8時10分から9時50分までおこなわれる基本授業（エポック授業）は、おおよそ次のような内容配分で進められていく。

1年生の導入はフォルメン<sup>\*\*</sup> (Formen) という線や形の素描で始まり、1・2年生の間は、リコーダーを吹いたり、お芝居をしたりしながら、国語と算数がおこなわれる。3年生では、これに生活科（家づくり、畑づくり、商店の仕事などの体験学習）が加わる。4年生では、生活科が理科と社会に分かれ、5年生では、さらに生物・地理・歴史となる。6年生では、新しく幾何が始まり、7年生では、理科系が生物・物理・化学に分かれる。8年生からは美学が加

\* A4判とA4判よりやや大きいものがあり、やや厚手の上質紙が8～16枚綴られ、ページとページの間に薄い紙がとじ込まれ、クレヨンの色などが互にくっつかないようにしている。白紙のものも線を引いてあるものもある。ヴァルドルフ学校の特注品で、普通の文房具店では売っていない。

\*\* ドイツ語で「形」という意味 (Formの複数形)。形に対する感覚を育てることが基本的に重要だと考えられ、独立した授業時間をとっていないが、いろいろな教科の授業の中に少しずつとり入れられ、5年生あたりまで続く。幾何・生物などの土台となる。精神力の集中、指先の訓練 (脳の発達促進) という目的もある。



表1 ヴァルドルフ学校のカリキュラム例（一部分の教科目について単純化して掲載）

学年	フォルメン素描→幾何学	オイリュトミー	手 仕 事	彫 刻 ・ 工 芸	絵 画
1	数学・地理・植物学・人間学・天文学・美術・美術史の基礎的学習としておこなわれる。 直線と曲線の勉強（生きた形態のとらえ方を実習）。	見える言葉，見える歌として，12年生まで続けられる。 簡単なリズム運動や棒練習。	編み物		水彩絵具による3原色の単純な色彩調和（色彩の中に霊（精神）の力を把握する6年生まで色の学習は続く）。
2	オイリュトミーで無期限（8の字）を一緒に作りながら歩かせる。輪を美しく意識させ，次第に複雑なものにしていく。（自然界の対称を意識させて，線で素描きさせる）		鉤棒編み		色の学習。 モチーフ（童話・神話・物語・四季）
3	フォルメン素描が角・楕円・曲線などの形で生活の中に生かされていることに気づかせる。	母音と子音によって，次のようなテーマでおこなわせる。 友人， 愛， 山， 光， 海， 鳥，など	自分や他人の衣服の制作（シャツ・ワンピース・ズボン）。ミシンで縫えるようにする。		
4	定規とコンパスによって幾何学図形を作り，生活の中で楽しむ。		毛糸・粘土・竹・木などによって，オモチャの製作をおこなわせる。（芸術的創造性を呼び起こす）		色は3原色のみを使用。色価を重視した絵画製作。 モチーフは次のとおりである。 鉱物，植物， 光・天候， 地・水・火， 風
5					
6	図形と関連づけて，幾何学の授業がおこなわれる。	オイリュトミーの中で動く幾何学を表現させる。		彫刻の登場（手仕事から芸術創造に移行したもの）	
7		思春期の恥じらいで，魂の内容を表現するのに最も難しい時期。	男子は，皮細工・かご細工などの工芸品の製作のほかに，機械作業をおこなわせる。		色彩は使用させない。絵画は白黒の明暗描写となる。
8	抽象的証明問題による幾何学が始まる。				形態の追究
9	数学への関心が高まる。種々の曲線（放物線・双曲線など）に習熟させる。	叙情詩・戯曲・音楽などを学校の舞台上演させる（親たちの前で集団で上演する場合もある）。			
10	平面幾何学				多層技法による色彩の世界にもどる（3原色）。
11	投影幾何学		銀製ボール，金属器の製作，金属細工		色彩と形による純粋な絵画製作がはじめておこなわれる（12年生まで続く）。 モチーフ（静物・人物）
12			機械の機能をもったオモチャの制作。		モチーフ（人間の顔）
(13)	アビトウアー・コース（大学進学のための国家試験準備）				

写真8  
粘土による  
造形制作



写真9  
手芸・工作  
(手仕事)



写真10  
オイリュト  
ミー



わる……というように、エポックの種類が増え、内容が深まっていく。また、9年生から12年生までの上級学年では、毎年約半月間の校外での社会実習（森林業・農業・社会福祉・工業などの実地学習）がある。実際のエポック・テーマは、園芸・健康・天文・栄養・動物・植物・鉱物・文学・神話・美術史・郷土誌……というように、具体的に設定される。

基本授業のあと、20分間の大休憩をはさんで、45分単位の専門授業（Fachunterricht）が4時間予定されている（各時間の間には5分間の小休憩がある。1週間の時間割が決まっており、時間数は低学年ほど少なくなっている）。

大休憩のあと、時間割の中に規則的に配分されている教科目は、まず、規則正しい練習を必要とする外国語である。西ドイツにある学校の場合、1年生から母国語であるドイツ語のほかに、英語とフランス語（またはロシア語）を学ぶ。遊び・歌・絵から始まり、聞きとり、会話と進められていくが、読み・書きは4年生になって初めて教えられる。

学習時間が適当に分散され、毎週1、2度ずつ繰り返すことが有益とされる教科目も、専門授業の時間割の中に定められている。それは、オイリュトミー（Eurhythmie）<sup>\*</sup>、体育、手芸・工作（手仕事）、絵画、音楽、宗教などである（ただし、音楽・絵画などは、1・2年では、あらゆる場面で適宜取り入れられるので、独立した教科目にはなっていない）。

以上の専門授業は、それぞれ専門教科の教師が指導に当たる。また、この学校では全員が本格的に何か楽器を習うことになっているので、放課後、希望者には、楽器の個人レッスンが受けられるようになっている。

##### 5. 点数化されない学習結果の評価

ヴァルドルフ学校の特徴の一つとして、テスト（試験）がない、ということがあげられる。とはいえ、全然ないのではなく、高学年の生徒に対しては、必要最小限の知識を確認するための小テストを便宜的におこなうことはある。つまり、授業を進めていく手がかりとしてテストを利用することはあるが、成績をつけるためのテストはない、ということである。

教師が学習結果をどのようにして確認していくかという点、時々、区切りのいいところで生徒にノートを提出させ、それを点検する形でおこなわれる。もちろん、テストの代わりにそれを点検して点数をつけようというのではない。生徒が書いたことの事実に誤りを訂正するため、最後に全体的な所見を書き込むためにおこなうのである。

写真11 フルートの個人レッスン



\* ギリシア語で「美しいリズム」という意味。ある一つの美しい動きには規則があるが、それに従ってからだを一つの楽器として動かす（見えない世界を目に見えるようにする意識化の）芸術。体操でも、ダンスでもない。シュタイナー教育で重視される独得な教科目である。



周知のように、テストは覚えたかどうかを試すもので、その結果は得点という数字で表わされる。与えられた教科書の中身をそのまま覚え込んで、そのまま紙にはき出すことにあり、明らかに統一的な正解が要求される。一方、ノートはもともとまったくの白紙であって、教科書を与えられない生徒は、ここに自分の手で自分の教科書を作るのである。それは、覚えたかどうかではなく、どう学んだかのプロセスである。教師は、これを試すのではなく、確認し、言葉によって（点数ではなく）結果の判断を超えた今後のための指針を与えようとする。ノートの出来上がりは、一つとして同じもののないオリジナルなものなのである。すなわち、テストが画一・受動・模倣を特徴としているのに対して、ノートは個性・能動・創造を特徴とするものであるといえよう。

テストがないということは、点数による評価がなされないということであり、落第制度もないということである（西ドイツの公教育では、テストのたびに6段階の点数評価がなされ、学年末にはかなりの数の落第者や飛び級者がでる）。通知表（通信簿）もないかという、そうではない。普通の学校のように、学年末には、生徒たちは担任教師から通知表をもらい、家に持って帰り親に見せるようになっている。

通知表の様式は学校によって若干違うようであるが、バーセル市の学校でいただいたものは、クリーム色の厚手の用紙を用いたA4判の三つ折り形式の一枚紙である。表紙と裏表紙に、氏名・学年・学級・生年月日・日付・学級担任名などの記入欄があるが、4ページある記録ページはまったくの白紙である（履修教科目名とか欠出席表とか身体記録表とかいった記入枠はまったくない）。

ただの白紙からなる記録ページは、基本授業については担任教師によって、専門授業については各担当教師によって、手書きの文章でうめられる。生徒の性格描写と学業評価について、否定的、宣告的な表現を避け、愛情をもって、しかも事実即した内容で記述される。教師が毎回大変な苦勞をして書き上げるこの通知表の中には、生徒の姿が生き生きと描写されている。基本授業の文章の最後には、担任教師自作の詩（一人一人に対して違った詩）が書かれる。その詩は生徒への教師の声援と願いである。生徒は、次の学年、毎朝交代でこの詩をクラスの皆の前でとなえることになっている（それは、一方では自分の気質を解放し、同時に欠点を克服していけるように、言葉とリズムによる治癒力を意図してなされる）。

## Ⅶ お わ り に

以上、シュタイナー教育について見聞した概要を報告したが、終わりにあたって、次の点をことわっておかなければならない。

① このレポート作成にあたっては、現地で得られた資料・録音・写真・ビデオなどの検討によって、なるべく客観性・具体性のあるものにすべく努力したが、不明な点が多く、すでに出版されている著書・訳書によって補った部分も少なくない。一部の写真も文献から転載した。参考・引用文献名を末尾にあげて、関係各位の了承を得たい。

② シュタイナーの人間観については、まったくといっていいほど述べていない。その理由は、難解でわれわれの理解が不十分であること、これについてふれるだけの紙面の余裕がないことにある。しかし、シュタイナーの人間観の理解は、実はこれまで述べてきた建物や授業方法の現象面よりもはるかに重要な点なのである。末尾の文献を参照願いたい。

③ 視察したシュタイナー教育施設で、幼稚園・障害児学校・教師養成所についても、十分紹介できなかつた。また、シュツットガルト郊外にある人智的医学の実践の場であるフィルダー病院（Filderklinik）についても、まったくふれることができなかった。一層の学習を深めて、機会があれば、これら（②を含めて）についても報告したい。

最後に、この視察旅行に御理解・御援助下さった本学関係の皆さんに、また、資料提供と助言をいただいた国内のシュタイナー教育関係の皆さん、現地でお世話になったヴァルドルフ学校関係の皆さん、日本私立小学校連合会のツアーの皆さん、留学生の松田仁さんに、心から感謝申し上げます。

写真12 ウィーンのルドルフ・シュタイナー学校で



（左から加藤, E. Jordi先生, 白佐。撮影:北村）

## 文 献

- 1) 上松佑二：ルドルフ・シュタイナー，パルコ出版，1980
- 2) ヴェーア，G. 著，新田義之ほか訳：シュタイナー教育入門，人智学出版，1983
- 3) 国際ヴァルドルフ学校連盟編，高橋巖ほか訳：自由への教育，創林社，1982
- 4) 子安美知子：ミュンヘンの小学生，中央公論社，1975
- 5) 子安美知子：ミュンヘンの中学生，朝日新聞社，1980
- 6) 子安美知子：魂の発見，音楽之友社，1981
- 7) シュタイナー，R. 著，新田義之訳：教育の基礎としての一般人間学，人智学出版社，1980
- 8) シュタイナー，R. 著，新田義之訳：教育の根底を支える精神的心意的な諸力，人智学出版社，1981
- 9) シュタイナー，R. 著，大西そよ子訳：精神科学の立場から見た子供の教育，人智学出版社，1980
- 10) ツァイルマンズ，F. W. ほか著，伊藤勉ほか訳：ルドルフ・シュタイナ，人智学出版社，1980
- 11) ニーダーホイザー，H. R. 著，高橋巖訳：シュタイナー学校のフォルメン線描，創林社，1983
- 12) ヘムレーベン，J. ほか著，定方昭夫ほか訳：シュタイナー入門，人智学出版社，1982
- 13) ベルン自由教育連盟編，子安美知子訳：“授業”からの脱皮，晩生書房，1980
- 14) リンデンベルク，C. 著，新田義之ほか訳：自由ヴァルドルフ学校，明治図書出版，1977